臨　床　検　査　科

臨床検査科

臨床検査技師長　渡司　博幸

平成 30 年度の臨床検査科は、以下に掲げた「臨床検査科の取り組み目標」の達成に向け、各部門が業務に邁進した。総検査件数（技師実施件数）は、対前年度比で 102.4％（検体検査 102.6％、生理検査 98.9％）とやや増加した。

検体検査は、血液学的検査（102.4％）、生化学的検査（102.7％）、免疫学的検査（104.1％）などの分野では増加傾向であった。生理検査では、呼吸機能検査（108.9％）と脳波検査（107.0％）は増加、筋電図検査（100.0％）は前年同様であったが、超音波検査（94.6％）、心電図検査（89.3％）、では懸案事項であるマンパワー不足の影響で前年度実績を下回ってしまったが、機器の十分な活用、検査依頼の安定確保、各種検査の充実は図られていた。また、入院後の検体検査や生理検査は可能な範囲で必要最小限にしていただき、外来時に検査を実施するようにお願いしている。その外来比率は、検体検査が 63％、生理検査では 81％（心電図 70％、呼吸機能 89％、超音波 72％）であった。

各部門の取り組みとして、検体検査では診療報酬の改定に合わせて検査項目を見直し、効率的で無駄のない運用に努めた。微生物検査では、抗酸菌の遺伝子検査装置が更新されたことで検体処理に係る作業が軽減された。ICT（院内感染対策チーム）やAST（抗菌薬適正支援チーム）の活動にも積極的に参画し感染管理に努めると共に各部門に情報提供を行った。病理検査では、作成する病理組織・細胞診標本の質を向上させながら医療材料、試薬を見直し安価な製品に切り替えた。生理検査では、ホルター心電図、超音波検査、精密肺機能検査等はマンパワー不足が懸念されてはいるが、臨床の要望に沿ってフレキシブルに対応し年間目標件数達成に向けて患者サービス、収益確保に繋げた。輸血検査では、血液製剤の使用状況を調査し輸血療法委員会において検討したうえで適正使用を推進した。また、安全で安心な輸血療法が行えるように臨床とコミュニケーションを密にとり、血液製剤の有効利用と廃棄率の減少に努めた。

最後に平成30年12月に医療法等の一部改正が行われ、検体検査の精度確保のための標準作業書、機器保守管理標準作業書等の書類整備が必要となった。そのために検査科職員が一丸となって各種マニュアルの改訂や標準作業手順書等の必要書類を整備し、法改正に合わせた業務を行い精度管理の維持向上に努めている。

1. 平成 30 年度　臨床検査科の取り組み目標

1）臨床検査の精度の維持・向上と検査経費の逓減化及び業務効率の向上
　精度管理、各種経費の検証、算定漏れ防止、部門間のオーバーラップ業務

2）検体検査一元化事業の効率的な運用及び業務の遂行
　検査機器の十分な活用と積極的な業務及び経営改善

3）臨床検査技師による超音波検査件数の目標数確保、質の向上
　導入検査機器の十分な活用、検査依頼の安定確保、各種検査の充実

4）安全な輸血検査業務と血液製剤管理体制の強化
　輸血療法委員会の活性化に向けた積極的な業務遂行

5）チーム医療の推進（ICT・NST・外来採血・治験業務等）、専門性を高めチーム医療を実践、患者接遇向上、個人・組織として存在意義の明確化

6）新規領域への挑戦
　患者サービス・経営改善に繋がる新規項目の積極的な導入、検査項目見直し

7）医療安全対策の推進（情報共有とヒヤリハット報告への対応強化）
　事例報告書（レベル 0 報告）の作成と検査科内での回覧による周知
　ヒヤリハットの検証と対策、健康で安心・安全・清潔な作業環境の整備（5S 活動等）

8）専門知識の習得・技術の向上（各種研修会参加、学会発表、認定資格取得等）
　専門知識・技術の共有（伝達・指導）

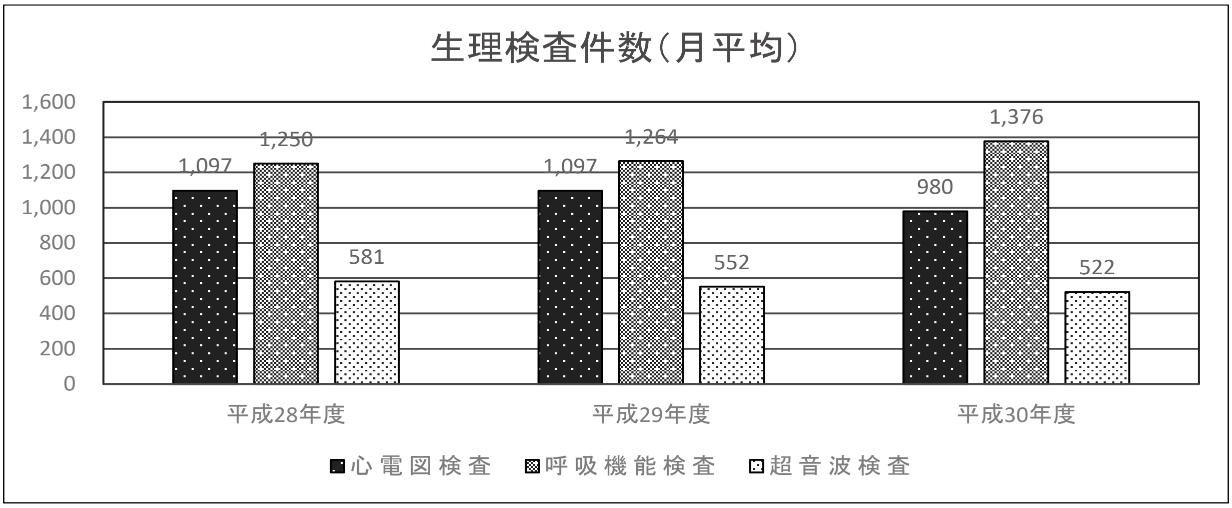
9）医療法改正に合わせた文書作成と業務体制の構築

2．平成 30 年度　臨床検査件数　前年度比較

臨床検査件数　(技師実施件数)

		平成 29 年度	平成 30 年度	前年度比
総　件　数		1,417,029	1,451,992	102.4
検体検査	検体検査総数	1,381,234	1,416,593	102.6
	尿 検 査	24,337	23,507	96.6
	糞 便 検 査	620	581	93.7
	穿刺液 ・ 採取液検査	277	318	114.8
	血 液 学 的 検 査	193,527	198,206	102.4
	生 化 学 的 検 査	992,855	1,019,709	102.7
	免 疫 学 的 検 査	112,886	117,464	104.1
	微 生 物 学 的 検 査	52,370	51,980	99.3
	病 理 学 的 検 査	1,564	1,714	109.6
	細 胞 学 的 検 査	2,798	3,114	111.3
生理機能検査	生理検査総数	35,795	35,399	98.9
	心 電 図 検 査	13,163	11,758	89.3
	筋 電 図 検 査	497	497	100.0
	脳 波 検 査	344	368	107.0
	呼 吸 機 能 検 査	15,172	16,516	108.9
	超 音 波 検 査	6,619	6,260	94.6
剖 検 数		14	12	85.7
外 部 委 託 件 数		42,883	49,086	114.5
外部委託検査総金額 (税抜)		62,477,121	65,485,522	104.8

3．生理検査項目別件数　(技師実施件数:月平均)



4．業務の専門知識・技術の向上

業務の専門知識・技術の向上において、スタッフ全員が積極的に院内外の各種研修会・学会・認定試験受験等で自己研鑽に努めた。

【学会・研修会・勉強会】

・国立病院臨床検査技師協会(国臨協)関信支部主催研修会

・東京都臨床検査技師会研修会
・東京都超音波研究会
・輸血に関する勉強会、セミナー
・首都圏臨床化学セミナー
・関東信越グループ主催研修会
・その他 30 余の研修会等に参加

【学会発表】

・第 59 回日本臨床細胞学会総会　　　　　我妻　美由紀
・第 46 回国臨協関信支部学会　　　　　　呉　　麻子

【検査科勉強会】

・緊急検査（生化学・血液）について（4 月）
・緊急検査（輸血）について（5 月）
・QMSの概要について、SOP作成セミナー（6 月）
・実習生研究発表（6 月）
・呼吸機能検査測定時における患者急変の救急対応（8 月）
・休日・夜間の微生物検査について（9 月）
・心電図（10 月）
・化学薬品のリスクアセスメントと病理の最近の話題（12 月）
・狭心症・心筋梗塞におけるST変化の機序／顕微鏡講習会に参加して（1 月）
・平成 30 年度国臨協関信支部症例検討会の事前検討（2 月）
・仕事の役割（3 月）

【資格認定】

認定超音波（泌尿器）　　　　　呉　麻子

5. 臨床検査外部精度管理調査

臨床検査の精度管理は、日常の内部精度管理はもとより日本医師会精度管理調査、日臨技臨床検査精度管理調査、都臨技臨床検査精度管理調査に参加した。また、各メーカーが行っている外部精度管理プログラムにも参加し、検査精度の維持・向上に努めた。

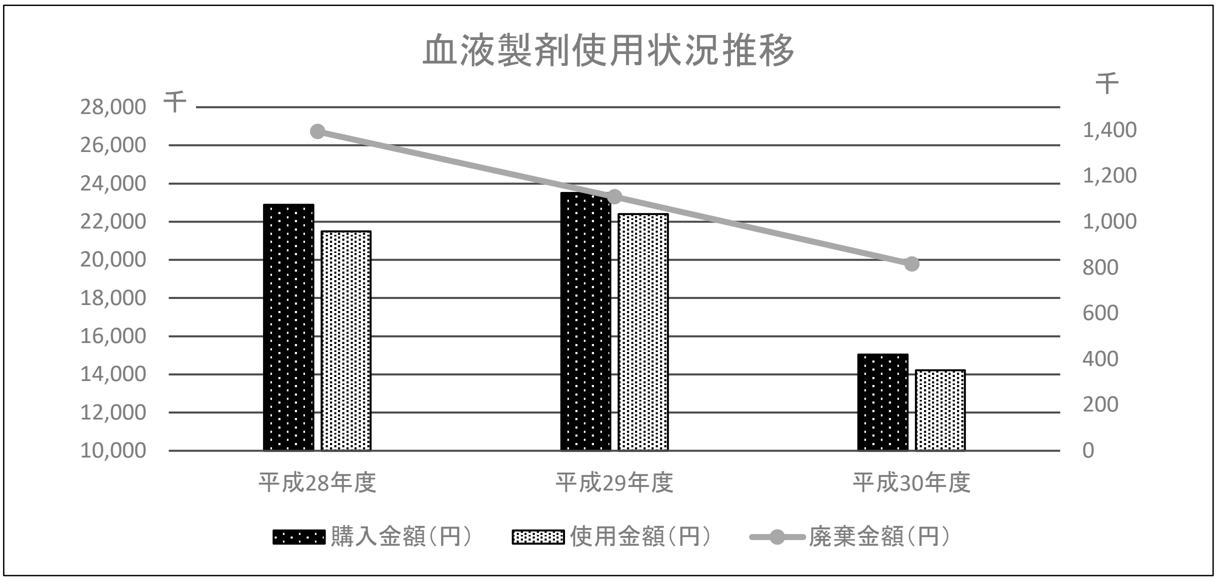
・平成 30 年度日本医師会臨床検査精度管理調査　　　94.2 点
・平成 30 年度日臨技臨床検査精度管理調査　　　100.0 点
・平成 30 年度都臨技臨床検査精度管理調査　　　100.0 点

6. 平成 30 年度　臨床検査科の取り組み

部門	内　　　容
病理	・真菌蛍光染色試薬、10％中性緩衝ホルマリン、生検用の包埋カセットなどを安価な製品に変更した。
検体	・未保険項目のTTT及び ZTT 検査を中止 ・心筋トロポニン T（定性）から心筋トロポニン I(定量）に変更した。
細菌	・抗酸菌の遺伝子検査装置が TRC rapid160 より TRC Ready80 に更新され操作性が大幅に向上した。 ・治験支援業務として新規結核診断薬の予備臨床試験、COBAS4800MTB/MAC 試験、迅速菌用MICパネル多施設評価などに協力した。 ・培地を変更し血液培養検体におけるグラム陽性菌とグラム陰性菌の混合感染例をそれぞれ分離培養可能にした。

7. 輸血用血液製剤の使用状況

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
購入金額(円)	22,887,215	23,505,177	15,035,266
使用金額(円)	21,493,570	22,395,693	14,219,312
廃棄金額(円)	1,393,645	1,109,484	815,954
廃棄率(%)	6.1	4.7	5.4



8. 平成 30 年度　医療機器整備

1)病理検査室

平成 30 年 5 月　顕微鏡　ECLIPSE　Ci　(NIKON)

平成 30 年 8 月　顕微鏡　BX43　(OLYMPUS)

2)細菌検査室

平成 30 年 12 月　TRC Ready80　(東ソー)

9. 人員配置

1) 臨床検査技師 18 名(非常勤技師 2 名含)、検査助手 2 名(非常勤技師外) 計 20 名

2) 人事異動

【平成 30 年 4 月 1 日付】

矢野　政敏	主任技師	(配置換)	信州上田医療センターより
春原　麻衣	主任技師	(配置換)	国際医療研究センター病院より
宮原　和秀	技　師	(非常勤採用)	
早川真奈美	技　師	(非常勤採用)	
若林　弘	主任技師	(昇　任)	霞ヶ浦医療センターへ
小川　佳亮	技　師	(昇　任)	成育医療研究センターへ
浦田　兼司	技　師	(再雇用)	